

校異源氏物語・もみちの賀

朱雀院の行幸は神な月の十日あまりなりよのつねならすおもしろかるへきたひの事なりければ御かたゝものみたまはぬ事をくちおしかり給うへも藤つほのみ給はさらむをあかすおほさるれはしかくを御前にてせさせ給ふ源氏中将はせいかいはをそまひたまひけるかたてには大とのゝとふの中将かたちよい人にはことなるをたちならひてはなを花のかたはらのみやま木なり入かたのひかけさやかにさしたるにかくのこゑまさりものゝおもしろきほとにおなしまひのあしふみおもゝちよにみえぬさまなりゑいなとし給へるはこれやほとけの御かれうひんかのこゑならむときこゆおもしろくあはれなるにみかとなみたをのこひ給ひかむたちめみこたちもみなきたまひぬゑいはてゝそてうちなをしたまへるにまちとりたるかくのにきはゝしきにかほのいろあひまさりてつねよりもひかるとみえ給春宮の女御かくめてたきにつけてもたたならすおほして神などそらにめてつへきかたちかなうたてゆゝしとの給をわかき女房などは心うしとみゝとゝめけり藤つほはおほけなき心のなからましかはましてめてたくみえましとおほすに夢の心ちなむし給ひける宮はやかて御とのゑなりけるけふのしかくはせいかいはに事みなつきぬないかゝみ給ひつるときこえ給へはあいなう御いらへきこえにくゝてことに侍つとはかりきこえたまふかたてもけしうはあらすこそみえつれまひのさまでつかひなむゑのこはことなるこの世に名をえたるまひのをのこともゝけにいとかしこけれとこゝしうなまめいたるすちをえなむみせぬこゝろみの日かくつくしつれはもみちのかけやさうゝしくと思へとみせたてまつらんの心にてよふいせさせつるなときこえたまふつとめて中将の君いかに御らむしけむよにしらぬみたりこゝちなからこそ

ものおもふにたちまふへくもあらぬみのそてうちふりし心しりきやあなかしことある御返めもあやなりし御さまかたちにみ給ひしのはれすやありけむ

から人のそてふることはとをけれとたちゑにつけてあはれとはみき大かたにはとあるをかきりなふめつらしうかやうのかたさへたとゝしからす人のみかとおもほしやれる御きさきことはのかねてもとほゝゑまれてち経のやうにひきひろけてみいたまへり行幸にはみこたちなとよにのこる人なくつかうま

つり給へり春宮もおはしますれいのかくのふねともきめくりてもろこしこま
とつくしたるまひともくさおほかりかくのこゑつゝ、みのをとよをひゝかすひと
ひの源氏の御ゆふかけゆゝ、しうおほされてみす経など所〳〵にせさせ給ふをき
く人もことはりとははれかりきこゆるにとうくうの女御はあなかななりとにく
みきこえ給ふかいしろなど殿上人地下も心ことなりとよ人におもはれたるいう
そくのかきりとゝのへさせ給へりさい将ふたり左衛門督右衛門督ひたりみきの
かくのことをこなふまひの師ともなと世になへてならぬをとりつゝ、をの〳〵こ
もりゐてなむならひけるこたかきもみちのかけに四十人のかいしろいひしらす
ふきたてたるものゝねともにあひたるまつ風まことのみ山をろしときこえて吹
まよひ色〴〵にちりかふこのはの中よりせいかひはのかゝやきいてたるさまいと
おそろしきまてみゆかさしのもみちいたうちりすきてかほのにほひにけおされ
たる心ちすれはおまへなる菊を折て左大将さしかへ給日暮かゝるほとにけしき
はかりうちしくて空のけしきさへみしりかほなるにさるいみしきすかたに菊
の色〴〵うつろひえならぬをかさしてけふはまたなきてをつくしたるいりあやの
ほとそゝろさむくこのよの事とおほえすものみしるましきしも人などのこの
もといはかくれ山のこのはにうつもれたるさへすこしものゝ心しるはなみたお
としけり承香殿の御はらの四のみこまたわらはにて秋風楽まひ給へるなむさし
つきのものなりけるこれらにおもしろさのつきにければこと事にめもうつら
すかへりてはことさましにやありけむ其夜源氏の中将正三位し給頭中将正下の
かゝいし給かむたちめはみなさるへきかきりよろこひし給もこの君にひかれ給
へるなれは人の目をもおとろかし心をもよろこはせ給むかしの世ゆかしけなり
宮はそのころまて給ぬれはれいのひまもやとうかゝひありき給をことにてお
ほいとのはさはかれ給ふいとゝかのわか草たつねとり給ひてしを二条院には
人むかへ給ふなりと人のきこえければいとこゝろつきなしとおほいたりうち
〳〵のありさまはしり給はすさもおほさむはことはりなれと心うつくしくれい
の人のやうにうらみの給はゝわれもうらなくうちかたりてなくさめきこえてん
ものをおもはすにのみとりない給心つきなさにさもあるましきすさひこともい
てくるそかし人の御ありさまのかたほにその事のあかぬとおほゆるきすもなし
人よりさきにみたてまつりそめてしかはあはれにやむことなくおもひきこゆる
こゝろをも知給はぬほとこそあらめつゐにはおほしなをされなむとおたしくか
る〳〵しからぬ御心のほとものをのつからとたのまるゝかたはことなりけりおさ
なき人はみついたまふまゝにいとよき心さまかたちにてなに心もなくむつれま

とはしきこえ給しはしとのゝうちの人にもたれとしらせしとおほしてなをはなれたるたいに御しつらひになくしてわれもあけ暮いりおはしてよろつの御事ともをゝしへきこえ給いてほんかきてならはせなとしつゝたゝほかなりける御むすめをむかへ給へらむやうにそおほしたるまむ所けいしなどをはしめことにわかちてこゝろもとなからすつかうまつらせ給ふこれみつよりほかの人はおほつかなくのみおもひきこえたりかのちゝみやもえしりきこえ給はさりけりひめ君はなをとぎゝ思ひいてきこえ給ときあま君をこひきこえ給おりおほかりきみのおはするほとはまきはし給をよるなどは時ゝこそとまりたまへこゝかしこの御いとまなくてくるれはいて給をしたひきこえ給おりなとあるをいとらうたくおもひきこえ給へり二三日うちにさふらひおほとのおはするおりはいといたくくしなとしたまへは心くるしうてはゝなきこもたらむ心ちしてありきもしつ心なくおほえ給そうつはかくなむときゝ給てあやしきものからうれしとなむおもほしけるかの御法事なとし給ふにもいかめしうとふらひきこえ給へり藤つほのまかてたまへる三条の宮に御あり様もゆかしうてまいり給へれば命婦中納言君中務などやうの人ゝたいめしたりけさやかにもてなし給かなとやすからすおもへとしつめておほかたの御物かたりきこえ給ふほとに兵部卿宮まいり給へりこの君おはすときゝ給てたいめし給へりいとよしあるさまして色めかしうなよひたまへるを女にてみむはおかしかりぬへく人しれすみたてまつり給にもかたゝゝむつましくおほえ給てこまやかに御物かたりなときこえ給宮も此御さまのつねよりもことになつかしううちとけ給へるをいとめてたしとみたまつりたまひてむこになとはおほしよらて女にてみはやというめきたる御心にはおもほすくれぬれはみすの内に入給をうらやましくむかしはうへの御もてなしにいとけちかく人つてならてものをもきこえたまひしをこよなうとみ給へるもつらうおほゆるそわりなきやしはゝもさふらふへけれとことそと侍らぬほとはをのつからおこたり侍をさるへき事などはおほせ事も侍らむこそうれしくなとすくゝしうていて給ひぬ命婦もたはかりきこえむかたなく宮の御けしきもありしよりはいとゝうきふしにおほしをきて心とけぬ御けしきもはつかしくいとをしけれはなにのしるしもなくて過行はかなのちきりやおほしみたるゝ事かたみにつきせず少納言はおほえすおかしきよをみるかなこれもこあまうへのこの御事をおほして御をこないにもいのりきこえ給しほとけの御しるしにやとおほゆおほいとどのいやむ事なくとおはしますこゝかしこあまたかゝつらひたまふをそまことにおとなひ給はむほとはむつかしき事もやとおほえけるさ

れとかくとりわき給へる御おほえの程はいとたのもしけなりかし御ふくは、か
たは三月こそはとてつこもりにはぬかせたてまつり給ふをまたおやもなくてお
ひいて給しかはまはゆき色にはあらてくれなゐむらさき山ふきのちのかきりを
れる御こうちきなとをきたまへるさまいみしういまめかしとおかしけなりとお
こ君はてうはいにまいり給とてさしのそき給へりけふよりはおとなしくなり給
へりやとてうちゑみ給へるいとめてたうあひ行つき給へりいつしかひるなをし
すゑてそゝきゐたまへる三尺のみつしひとよろひにしなくしつらひすへて又
ちひさきやともつくりあつめてたてまつり給へるを所せきまであそひひろけた
まへりなやらふとていぬきかこれをこほち侍にければつくろひ侍そとていと大
事とおほいたりけにいと心なき人のしわざにも侍なるかないまつくろはせ侍ら
むけふはこといみしてなゝひたまひそとていて給けしき所せきを人々はしにい
てゝみたてまつればひめ君もたちいてゝみたてまつり給てひゝなの中の源しの
君つくろひたてゝうちにまいらせなとし給ことしたにすこしおとなひさせ給へ
とおにあまりぬる人はひゝなあそひはいみ侍ものをかく御おとこなとまうけた
てまつり給てはあるへかしうしめやかにてこそみえたてまつらせ給はめ御くし
まいるほどをたにものうくせさせ給なと少納言きこゆ御あそひにのみ心いれ給
へればはつかしとおもはせたてまつらむとていへは心のうちに我はさはおとこ
まうけてけりこの人々のおとことであるはみにくゝこそあれわれはかくおかし
けにわかき人をもゝたりけるかなと今そおもほししりけるさはいへと御としの
数そふしるしなめりかしかくおさなき御けはひのことにふれてしるけるはとの
ゝうちの人々もあやしと思ひけれといとかうよつかぬ御そひふしならむとはお
もはさりけりうちより大殿にまかてたまへればれひのうるはしうよそほしき御
さまにて心うつくしき御けしきもなくくるしければことしよりたにすこしよつ
きてあらため給御心みえはいかにうれしからむなときこえたまへとわざと人す
ゑてかしつき給ときき給しよりはやむ事なくおほしさためたる事にこそはとこ
ゝろのみをかれていとゝうとくはつかしくおほさるへししひてみしらぬやうに
もてなしてみたれたる御けはひにはえしも心つよからす御いらへなとうちきこ
え給へるはなを人よりはいとことなりよとせはかりかこのかみにおはすればう
ちすくしはつかしけにさかりにとゝのほりてみえ給なに事かはこの人のあかぬ
所はものし給わか心のあまりけしからぬすさひにかくうらみられたてまつるそ
かしとおほししらるおなし大臣ときこゆるなかにもおほえやむ事なくおはする
か宮はらにひとりいつきかしつき給御心をこりいとこよなくてすこしををろか

なるをはめさましとおもひきこえ給へるをおとこ君はなとかいとさしもとなら
はい給御心のへたてともなるへしおとゝもかくたのもしけなき御心をつらしと
おもひきこえ給なからみたてまつり給時はうらみもわすれてかしつきいとなみ
きこえ給ふつとめていて給ふ所にさしのそき給て御さうそくし給ふになたかき
御をひ御てつからもたせてわたり給て御そのうしろひきつくろひなと御くつを
とらぬはかりにし給いとあはれなりこれはないえむなどいふ事も侍なるをさや
うのおりにこそなときこえ給へはそれはまされるも侍りこれはたゝめなれぬさ
まなれはなむとてしひてさゝせたてまつり給けによろつかしつきたてゝみた
てまつり給ふにいけるかひありたまさかにてもかゝらん人をいたしいれてみん
にますことあらしとみえ給さむさしにとてもあまた所もありき給はす内春宮一
院はかりさては藤つほの三条の宮にそまいり給へるけふはまたことにもみえた
まふかなねひ給まゝにゆゝしきまてなりまさり給ふ御有さまかなと人ゝめてき
こゆるを宮き丁のひまよりほのみ給ふにつけてもおもほす事しけかりけりこの
御事のしはすもすきにしか心もとなきにこの月はさりともと宮人もまちきこえ
内にもさる御心まうけともありつれなくてたちぬ御ものゝけにやとよ人もきこ
えさはくを宮いとわひしうこの事によりみのいたつらになりぬへき事とおほし
なけく御心ちもいとくるしくてなやみ給中將の君はいとゝおもひあはせてみ
すほうなとさとはなくて所ゝにせさせたまふ世の中のさためなきにつけても
かくはかなくてややみなむとりあつめてなけき給ふに二月十よ日のほどにお
とこみこむまれ給ひぬれはなこりなくうちにも宮人もよろこひきこえ給いのち
なかくもとおもほすは心うけれとこうきてんなどのうけはしけにのたまふとき
ゝしをむなしくきゝなし給はましは人はらはれにやとおほしつよりてなむやう
ゝすこしつゝさはやい給けるうへのいつしかとゆかしけにおほしめしたる事
かきりなしのか人しれぬ御心にもいみしう心もなくて人まにまいり給てうへ
のおほつかなかりきこえさせ給をまつみたてまつりてくはしくそうし侍らむと
きこえ給へとむつかしけなるほとなれはとてみせたてまつり給はぬもことはり
なりさるはいとあさましうめつらかなるまでうつしとり給へるさまたかふへく
もあらず宮の御心のおにゝいとくるしく人のみたてまつるもあやしかりつるほ
とのあやまりをまさに人のおもひとかめしやさらぬはかなき事をたにきすをも
とむる世にいかなる名のつるにもりいつへきにかとおほしつづくるに身のみそ
いと心うき命婦の君にたまさかにあひ給ていみしき事ともをつくし給へとなに
のかひあるへきにもあらずわか宮の御事をわりなくおほつかなかりきこえ給へ

はなとかうしもあなちのたまはすらむ今をのつからみたてまつらせ給ひて
むときこえなからおもへるけしきかたみにたゝならすかたはらいたき事なれば
まほにもえのたまはていかならむよに人つてならてきこえさせむとてない給さ
まそ心くるしき

いかさまにむかしむすへるちきりにてこのよにかかる中のへたてそかゝる
事こそこゝろへかたけれとの給命婦も宮のおもほしたるさまなどをみたてまつ
るにえはしたなふもさしはなちきこえす

みてもおもふみぬはたいかになけくらむこやよの人のまとふてふやみあは
れに心ゆるひなき御事ともかなとしのひてきこえけりかくのみにひやるかたな
くてかへり給ものから人のものいひもはつらはしきをわりなき事にのたまはせ
おほして命婦をもむかしおほひたりしやうにもうちとけむつひ給はす人めたつ
ましくなたらかにもてなし給ものから心つきなしとおほすときも有へきをいと
はひしく思ひのほかになる心ちすへし四月にうちへまいり給ふほとよりはおほ
きにおよすけ給てやうくおきかへりなとし給あさましきまでまきれところな
き御かほつきをおほしやらぬ事にしあればまたならひなきとちはけにかよひ給
へるにこそはとおもほしけりいみしうおもほしかしつく事かきりなし源しの君
をかきりなきものにおほしめしなからよの人のゆるしきこゆましかりしにより
てはうにもすゑたてまつらすなりにしをあかすくちおしうたゝ人にてかたしけ
なき御ありさまかたちねひもておはするを御らむするまゝに心くるしくおほ
しめすをかうやむ事なき御はらにおなしひかりにてさしいて給へれはきすなき
たまとおほしかしつくに宮はいかなるにつけてもむねのひまなくやすからすも
のをおもほすれいの中将の君こなたにて御あそひなとし給にいたきいてたてま
つらせ給てみこたちあまたあれとそこをのみなむかゝる程よりあけ暮みしされ
はおもひわたさるゝにやあらむいとよくこそおほえたいとちいさきほとはみ
なくのみあるわさにやあらむとていみしくうつくしと思ひきこえさせ給へり
中將の君おもての色かはる心ちしておそろしうもかたしけなくもうれしくもあ
はれにもかたくうつろふ心ちしてなみたおちぬへし物かたりなとしてうちゑ
み給へるかいとゆゝしううつくしきに我身ながらこれににたらむはいみしうい
たはしうおほえ給そあなかななるや宮はわりなくかたはらいたきにあせもなか
れてそおはしける中將は中くゝなる心ちのみたるやうなれはまかて給ぬわか御
かたにふし給てむねのやる方なきほとすくして大いとのへとおほすおまへのせ
むさいのなにとなくあをみわたれる中にとこ夏の花やかにさきいてたるをおら

せ給て命婦の君のもとにかき給事おほかるへし

よそへつゝみるに心はなくさまで露けさまさるなてしこの花はなにさかな
んとおもひたまへしもかひなきよに侍りければとありさりぬへきひまにやあり
けむ御らむせさせてたゝちりはかりこの花ひらにときこゆるをわか御心にもも
のいとあはれにおほししらるゝほどにて

袖ぬるゝ露のゆかりとおもふにも猶うとまれぬやまとなてしことはかりほ
のかにかきさしたるやうなるをよろこひなからたてまつれるれの事なればし
るしあらしかしとくつをれてなかめふし給へるにむねうちさはきていみしくう
れしきにもなみたおちぬつく／＼とふしたるにもやるかたなき心ちすればれい
のなくさめにはにしのたいにそわたり給ふしとけなくうちふくたみ給へるひむ
くきあされたるうちきすかたにてふえをなつかしうふきすさひつゝのそきたま
へれは女君ありつる花の露にぬれたる心ちしてそひふし給へるさまうつくしう
らうたけなりあい行こほるゝやうにておはしなからとくもわたり給はぬなまう
らめしかりければれいならすそむき給へるなるへしはしのかたについてこち
やとの給へとおとろかすいりぬるいそのとくちすさみて口をゝいしたまへるさ
まいみしうされてうつくしあなにくかゝる事くちなれ給にけりなみるめにあく
はまさなき事そよとて人めして御こととりよせてひかせたてまつり給さうのこ
とはなかのほそをのたへかたきこそ所せけれとてひやうてふにをしくたしてし
らへ給かきあはせはかりひきてさしやり給へれはえゑしはてすいとうつくしう
ひき給ふちひさき御ほとにさしやりてゆし給御てつきいとうつくしければらう
たしとおほしてふえふきならしつゝおしへ給いとさとくてかたきてうしどもを
たゝひとわたりにならひとり給大かたらう／＼しうおかしき御心はへを思し事
かなふとおほすほそろくせりといふものはなはにくけれとおもしろふふきすさ
ひ給へるにかきあはせまたわかかれとはうしたかはす上手めきたりおほとなふ
らまいりてゑともなと御らむするにいて給へしとありつれば人々こはつくりき
こえてあめふり侍ぬへしなといふにひめ君れいの心ほそくてくし給へりゑもみ
さしてうつふしておはすれはいとらうたくて御くしのいとめてたくこほれかゝ
りたるをかきなてゝほかなるほとは恋しくやあるとのたまへはうなつき給われ
もひとひもみたてまつらぬはいとくるしうこそあれとおさなくおはするほとは
心やすくおもひきこえてまつくね／＼しくうらむる人の心やふらしと思てむつ
はしければしはしくもありくそおとなしくみなしてはほかへもさらにいくま
し人のうらみおはしなとおもふもよになかふありておもふさまにみえたてまつ

らんと思ふそなとこまゝとカタラひきこえ給へはさすかにはつかしうてともかくもいらへきこえ給はすやかて御ひさによりかゝりてねいり給ぬれはいと心くるしうてこよひはいてすなりぬとの給へはみなたちておものなとこなたにまいらせたりひめ君おこしたてまつり給ひていてすなりぬときこえ給へはなくさみておき給へりもろともものなとまいるいとはかなけにすさひてさらはね給ねかしとあやうけに思給つればかゝるをみすてゝはいみしみちなりともおもむきかたくおほえ給かやうにとゝめられ給おりゝなどもおほかるをゝのつからもりきく人おほいとのにきこえければたれならむいとめさましき事にもあるかな今までその人ともきこえすさやうにまつはしたはふれなとすらんはあてやかに心にくき人にはあらし内わたりなどにてはかなくみ給けむひとをものめかし給て人やとかめむとかくし給なゝり心なけにいはけてきこゆるはなとさふらふ人ゝもきこえあへりうちにもかゝる人ありときこしめしていとおしくおとの思ひなけるなるなどのたまはすれとかしこまりたるさまにて御いらへもきこえ給はねは心ゆかぬなめりといとおしくおほしめすさるはすきゝしううちみたれてこのみゆる女ほうにまれ又こなたかなたのひとゝとなへてならすなどもみえきこえさめるをいかなるものゝくまにかくれありきてかく人にもうらみらるらむとのたまはすみかとの御としねひさせ給ぬれとかうやうのかたえすくさせ給はすうねへ女くら人などをかたち心あるをはことにもてはやしおほしめしたればよしあるみやつかへ人おほかる比なりはかなき事をもいゝふれ給ふにはもてはなるゝ事も有かたきにめなるゝにやあらむけにそあやしうさい給はさめると心みにたはふれ事をきこえかゝりなとするおりあれとなさけならぬほどにうちいらへてまことにはみたれ給はぬをまめやかにさうゝしと思きこゆる人もありとしいたう老たる内侍のすけ人もやむことなく心はせありあてにおほえたかくはありなからいみしうあためいたる心さまにてそなたにはをもからぬあるをかうさたすくるまでなとさしもみたるらむといふかしくおほえ給ければたはふれ事いひふれて心みたまふににけなくも思はさりけるあさましとおほしなからさすかにかゝるもおかしふて物などの給てけれと人のもりきかむもふるめかしきほとなれはつれなくもてなし給へるを女はいとつらしとおもへりうへの御けつりくしにさふらひけるをはてにければうへはみうちきのひとめしめてさせ給ぬるほどに又人もなくてこの内侍つねよりもきよけにやうたいかしらつきなまめきてそうそくありさまいと花やかにこのましけにみゆるをさもふりかたうもと心つきなくみたまふ物からいかゝおもふらんとさすかにす

くしかたくてものすそをひきおとろかし給へれはかはほりのえならすゑかきたるをさしかくしてみかへりたるまみいたうみのへたれとまかはらいたくくろみおちいりていみしうはつれそゝけたりにつかはしからぬあふきのさまかなとみ給てわかもたまへるにさしかへてみ給へはあかきかみのうつるはかり色ふかきにこたかきもりのかたをぬりかくしたりかたつかたにてはいとさたすきたれとよしなからすもりの下草おひぬれはなとかきすさひたるをことしもあれうたての心はへやとゑまれなからもりこそなつのとみゆめるとてなにくれとの給ふものにけなく人やみつけんとかくるしきを女はさもおもひたらず

きみしこはたなれのこまにかりかはむさかりすきたる下葉なりともといふさまこよなく色めきたり

さゝわけは人やとかめむいつとなくこまなつくめるもりのこかくれわつらはしきにとてたち給ふをひかへてまたかゝるものをこそ思侍らね今さらなるみのはちになむとてなくさまいといみし今きこえむ思ひなからそやとてひきはなちていて給をせめてをよひてはしはしらとうらみかくるをうへはみうちきはてゝみさうしよりのそかせ給けりにつかはしからぬあはひかなといとおかしうおほされてすき心なしとつねにもてなやむめるをさはいへとすくさゝりけるはとてわらはせ給へはないしはなまゝはゆけれとにくからぬ人ゆへはぬれきぬをたにきまほしかるたくひもあなれはにやいたうもあらかひきこえさせす人々もおもひのほかなる事かなとあつかふめるを頭中将きゝつけていたらぬくまなき心にてまたおもひよらさりけるよと思ふにつきせぬこのみ心もみまほしうなりにければかたらひつきにけりこの君も人よりはいとことなるをかのつれなき人の御なくさめにとおもひつれとみまほしきはかきりあるをとやうたてのこのみやいたうしのふれは源しの君はえしり給はすみつけきこえてはまつうらみきこゆるをよはひのほといとおしければなくさめむとおほせとかなはぬ物うさにいとひさしくなりにけるをゆふたちしてなこりすゝしきよひのまきれに温明殿のわたりをたゝすみありき給へはこのないしひはをいとおかしうひきゐたり御前などにもおとこかたの御あそひにましりなとしてことにまさる人なき上手なれはものうらめしうおほえけるおりからいとあはれにきこゆうりつくりになりやしなましとこゑはいとおかしうてうたふそすこし心つきなきかくしうにありけむむかしの人もかくやおかしかりけむとみゝとまりてきゝ給ふひきやみていといったう思ひみたれたるけはひなりきみあつまやをしのひやかにうたひてより給へるにをしひらいてきませとうちそへたるもれいにたかひたる心ちそする

たちぬるゝ人しもあらしあつまやにうたてもかゝるあまそゝきかなとうち
なけくをわれひとりしもきゝおふましけれとうとましやなに事をかくまてはと
おほゆ

人つまはあなわつらはしあつまやのまやのあまりもなれしとそおもふとて
うちすきなまほしけれとあまりはしたなくやと思ひかへして人にしたかへはす
こしはやりかなるたはふれことなといひかはして是もめつらしき心ちそし給頭
中将は此君のいたうまめたすくしてつねにもとき給かねたきをつれなくてう
ちくゝしのひ給かたくゝおほかめるをいかてみあらはさむとのみ思ひわたるに
これをみつけたる心ちいとうれしかゝるおりにすこしをとしきこえて御心まと
はしてこりぬやといはむとおもひてたゆめきこゆ風ひやゝかにうちふきてやゝ
ふけ行ほとにすこしまとろむにやとみゆるけしきなれはやをらいくるに君は
とけてしもね給はぬ心なれはふときゝつけて此中将とは思よらすなをわすれか
たくすなるすりのかみにこそあらめとおほすにおとなくゝしき人にかくにけな
きふるまひをしてみつけれん事はつかしければあなわつらはしいてなむよ
くものふるまいはしるかりつらむものを心うくすかし給けるよとてなをしはか
りをとりて屏風のうしろにいり給ひぬ中将おかしきをねむしてひきたてまつる
屏風のもとによりてこほくゝとたゝみよせておとろくゝしくさはかすに内侍は
ねひたれといたくよしはみなよひたる人のさきくゝもかやうにて心うこかすお
りくゝありければならひていみしく心あはたゝしきにも此君をいかにしきこえ
ぬるかどわひしさにふるふくゝつとひかへたりたれとしられていてなはやとお
ほせとしとけなきすかたにてかうふりなとうちゆかめてはしらむうしろておも
ふにいとおこなるへしとおほしやすらふ中将いかて我としられきこえしとおも
ひて物もいはすたゝいみしういかれるけしきにもてなしてたちをひきぬけは女
あかきみくゝとむかひて手をするにほとくゝわらひぬへしこのましうわかやき
てもてなしたるうはへこそさりもありけれ五十七八の人のうちとけてものいひ
さはけるけはひえならぬ二十のわか人たちの御中にてものをちしたるいと月な
しかふあらぬさまにもてひかめておそろしけなるけしきをみすれと中くゝしる
くみつけ給て我としりてことさらにするなりけりとおこになりぬその人なめり
とみ給にいとおかしければたちぬきたるかひなをとらへていといたうつみ給へ
れはねたきものからえたへてわらひぬまことはうつし心かとよたはふれにくし
やいてこのなおしきむとの給へとつととらへてさらにゆるしきこえすさらはも
ろともにこそとて中将のおひをひきときてぬかせ給へはぬかしとすまふをとか

くひきしろふほとにほころひはほろ／＼とたえぬ中将

つゝむめるなやもりいてんひきかはしかくほころふるなかのころもにうへにとりきはしるからんといふ君

かくれなき物としる／＼なつころもきたるをうすき心とそみるといひかはしてうらやみなきしとけなすかたにひきなされてみないて給ひぬ君はいとくちおしくみつけれぬる事と思ひふし給へり内侍はあさましくおほえければおちとまれる御さしぬきおひなとつとめてたてまつれり

うらみてもいふかひそなき立かさねひきてかへりしなみのなこりにそこもあらはにとありおもなのさまやとみたまふもにくけれとわりなしとおもへりしもさすかにて

あらたちし浪に心はさはかねとよせけむいそをいかゝうらみぬとのみなむありけるおひは中将のなりけりわか御なをしよりは色ふかしとみ給にはた袖もなかりけりあやしの事ともやおりたちてみたるゝ人はむへおこかましき事はおほからむといと御心おさめられ給ふ中将とのゑ所よりこれまつとちつけさせ給へとてをしつゝみてをこせたるをいかてとりつらむと心やましこのおひをえさらましかはとおほすその色のかみにつゝみて

なかたえはかことやおふとあやふさにはなたのおひをとりてたにみすとしてやり給たちかへり

君にかくひきとられぬるおひなれはかくてたえぬるなかとかこたむえのかれさせ給はしとありひたけてをの／＼殿上にまいり給へりいとしつかにものとききましておはするに頭のきみもいとおかしけれとおほやけ事おほくそうしくたすひにていとうるはしくすくよかなるをみるもかたみにほゝえまる人まにさしよりてものかくしはこりぬらむかしとていとねたけなるしりめなりなとてかさしもあらむたちなからかへりけむ人こそいとおしけれまことはうしや世中よといひあはせてこのやまなるとかたみにくちかたむさてそのゝちともすれはこのついでにひひむかふるくさはひなるをいとゝものむつかしき人ゆへとおほししるへし女はなをいとおむにうらみかくるをわひしと思ありき給中将はいもうとの君にもきこえてすたゝさるへきおりのをとしくさにせむと思ひけるやむことなき御はら／＼のみこたちたにうへの御もてなしのこよなきにわつらはしかりていとことにさりきこえ給へるをこの中将はさらにをしけたれきこえしとはかなき事につけてもおもひいとみきこえ給ふこの君ひとりそひめ君の御ひとつはらなりけるみかとの御こといふはかりこそあれ我もおなし大

臣ときこゆれと御おほえことなるかみこはらにてまたなくかしつかれたるはなにはかりおとるへききはおほえたまはぬなるへし人からもあるへきかきりととのひてなに事もあらまほしくたらいてそのし給けるこの御中とものいとみこそあやしかりしかされとうるさくてなむ七月にそきさきみ給めりし源しの君宰相になり給ぬみかとおりるさせ給はむの御心つかひちかふなりてこのわか宮を坊にと思ひきこえさせ給に御うしろみし給へき人おはせず御は、かたのみなみこたちにて源しのおほやけ事しり給すちなねはは、宮をたにうこきなきさまにしをきたてまつりてつよりにとおほすになむありけるこうきてむいと、御心うこき給ことはり也されと東宮の御よいとちかふなりぬれはうたかひなき御くらゐなりおもほしのとめよとそきこえさせ給けるけに東宮の御母にて廿よ年になり給へる女御を、きたてまつりてはひきこしたてまつり給かたき事なりかしとれいのやすからす世人もきこえけりまいり給夜の御ともに宰相の君もつかふまつりたまふおなし宮ときこゆる中にもきさいはらのみこたまひかりか、やきてたくひなき御おほえにさへものし給へは人もいとことに思かしつききこえたりましてわりなき御心には御こしのうちもおもひやられていと、をよひなき心ちしたまふにすゝろはしきまてなむ

つきもせぬ心のやみにくる、かな雲井に人をみるにつけてもとのみひとりこたれつゝものいとあはれなりみこはおよすけ給月日にしたかひていとみたまつりわきかたけなるを宮いとくるしとおほせと思ひよる人なきなめりかしけにいかさまにつくりかへてかはおとらぬ御ありさまはよにいてものし給はまし月日のひかりの空にかよひたるやうにそ世人もおもへる